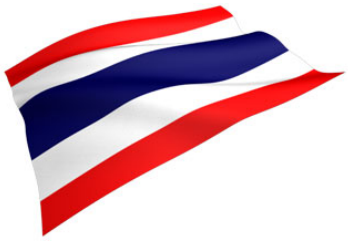


タイ王国　　派遣期間　2013年４月～2016年３月

バンコク日本人学校　帰国報告

北海道手稲養護学校
教　諭　橋本　伸明

１　タイの概要

公用語：タイ語
首　都：バンコク都
通　貨：タイバーツ（１バーツ、約３円）
国　王：プーミポン国王（ラーマ９世）
首　相：プラユット・チャンオチャ首相
面　積：513,120㎢（日本の1.35倍）
人　口：6,718万人（2016年）　（日本の約半分）
民　族：タイ族75%、華人14%、その他マレー系、インド系、モン族、カレン族などがいる。
宗　教：仏教（南方上座部仏教）95%、イスラム教4%、キリスト教、他にヒンドゥー教、シーク教、道教など

＜立憲君主制の国家＞

立憲君主制のもと、平時、国王は日本と同じ象徴的な存在であり、国王や王族は国民にとても尊敬される存在である。しかし、政治的な危機があると、国王の直接的、または間接的な介入が見られることは日本の象徴的な天皇とは違う。2014年の政治危機でもタクシン派の首相の進退問題に直接介入することがあり、国王の影響力は大きい。歩道橋やビルの広告、会社の建物の正面などに国王や王妃の肖像画が飾られ、国王や王妃の誕生日は、イメージカラーのTシャツやポロシャツを着て国中で祝う光景が見られた。映画館やコンサート会場、日本人学校での運動会の開会式、卒業式でも国王賛歌が流される。国旗や王族の旗も同様に大切に扱うように指導されている。タイの国旗は、中央の青線を白線が上下に囲み、さらに赤線がその外側を囲む。青は国王、白は宗教、赤は国家、国民の団結心を表している。

＜地理＞

タイは大きく四つの地域に分けられ、その地域ごとにいろいろな顔を見せる。北部は山岳地が広がり比較的涼しい気候である。タイ国内最高峰であるドーイ・インタノン（2,576m）もこの地域にある。東北部はほぼ全域にコーラート台地が広がり、雨量が少なく農作物が育ちにくい環境にあって、貧困地域の代表格にもなっている。中央部にはチャオプラヤー川が形成したチャオプラヤー・デルタと呼ばれる豊かな平地が広がり、世界有数の稲作地帯を作り出している。南部はマレー半島の一部でもあり、ゴムの木の畑などが広がるほか、近年までスズの採掘が盛んであった。また、雨期が中央部よりも長いことでも有名である。

＜気候＞

タイの気候は、熱帯性に分類され、モンスーンの影響が大きい。5月中旬から10月頃にかけては空気が湿り、なま暖かく、スコールなどを特徴とする雨季に見舞われる。北部および中部では、8月から10月にかけて降雨量が多く、しばしば洪水が引き起こされる。その後、11月から3月中旬までは雨が少なく、比較的涼しい乾季となり、12月頃に寒さのピークを迎える。しかし、寒さのピークといっても、最低気温が20度を少し下回る程度である。4月には暑季と呼ばれる非常に暑い気候となり、夏を迎える。半島部東海岸は年間を通じて降水量が多く、気温も高い。

＜国民＞

「微笑みの国」と呼ばれるように、タイ人は温厚である。道行く人にも笑顔で接してくれる人たちである。目上の人を敬い、礼儀正しい人柄である。また、子どもをとても大切にしている。バスや地下鉄に子どもを連れて乗ると、座っている人が子どもに声を掛け、席を譲ってくれることが多々あった。お年寄りや荷物を持って大変そうな人を見ると、同様に席を譲る優しさを感じることが頻繁にあった。

＜宗教＞

タイ人の多くは仏教徒であり、仏教徒関わりの深い生活を送っている。町の至る所に金色の装飾をした寺（ワット）があり、お参りをしたりお供えをしたりする人が絶えない。町中を僧侶が托鉢をして歩く姿は、タイの朝のいつもの風景である。僧侶に女性が触れることは、絶対に許されず、托鉢の場合は近くの男性に頼んで渡してもらう。

タイの挨拶は「ワイ」という合掌をして「サワディー・カップ（女性はカー）」と言う。このワイの形は本来、仏教で大切にされる花、蓮のつぼみをイメージしているそうである。仏教に関係する祝日も多く、その日は酒類の販売が禁止される。下の王室関係の祝日と憲法記念日以外は仏教に関わる祝日である。

2　タイの教育事情

タイの学校制度は、初等教育機関として初等学校（小学校に相当）、中等教育機関として前期中等学校（中学校に相当）及び後期中等学校（高等学校に相当）、高等教育機関として大学が設置されている。就業年限は、初等学校6年間、前期中等学校3年間、後期中等学校3年間、原則として大学4年間の「6・3・3・4制」となっている。年度の始まりと終わりは、5月16日から翌年3月15日までである。二学期制で、前期が５月16日から10月10日まで、後期は11月１日から翌年３月15日までとなっている。就学前教育機関として幼稚園が置かれており、就学前教育の在学率は、76.0%（2013年タイ教育省）となっている。高等学校の在学率は75.1%（2013年タイ教育省）、大学の在学率は46.5%（2013年タイ教育省）である。

ユネスコによると2005年のタイの青年識字率は98.1%、アジアでは日本、シンガポールと並んで高水準である。義務教育は日本と同じ15歳までだが、学歴社会なので、総じて就学意欲が高い傾向にある。タイの高等学校における在学率は75.1%と、日本に比べると高くはないが、在学率は年々上昇してきている。タイに、無試験で入学することができるランカムヘン大学（学生数約36万人）、スコータイ・タマティラート大学（学生数約16万人）という二つの公開大学が国民に対して広く高等教育の機会を提供している。

3　バンコクでの生活

子どもたちの住む地域は、トンロー、エカマイ、アソークというエリアが中心で、家賃30万円くらいのプール付マンションに住むのが一般的である。子どもたちのほとんどは登下校にスクールバスを利用し、毎日約200台のバスが学校とマンションを往復していた。一部、自家用車や徒歩で通学する子どももいるが少数である。マンションを朝６時30分頃出発し、渋滞になる前に学校へ到着する行程が組まれている。そのため、到着が早い子どもは、朝７時過ぎには教室にいる。遅い到着のバスでも７時40分頃には学校へ着くようになっていた。下校のバスでは、渋滞にはまってしまうと２時間かかるマンションもあり、各学級での教室を出発する時間が徹底され、各教務部長、各学年主任、副主任が無線を携帯し、突発的なトラブルなどの情報を共有し、時間に遅れずに毎日バスを送り出せるようにしていた。

居住地には、日本の食材を扱うスーパー、日本食のレストラン、ラーメン屋などが数多くあるため、日本と同じような生活ができる。また、学習塾や英会話教室、テニススクール、サッカースクール、バレエ、ダンス、空手など日本人を対象にした数多くのお稽古ごとが充実していた。職場の仲間と一緒に、仕事帰りにラーメンを食べ歩くというようなことができるほど、治安もよく、日本にいるのではないかと錯覚してしまうほどの生活を送ることができた。

4　バンコク日本人学校について

⑴　バンコク日本人学校の歴史

バンコク日本人学校は、大正15年(1926年)創立の盤谷日本尋常小学校を前身とする、世界一歴史のある学校である。第二次世界大戦のため一時閉校となったが、昭和31年(1956年)にサラディーンの日本国大使館内に「在タイ日本国大使館附属日本語講習会」として28人の子どもたちと４名の教師により改めて開設された。その後、様々な歴史的経緯から、泰日協会の協力を得て、昭和49年(1974年)に現在の「泰日協会学校」としてタイ国政府から正式に義務教育学校としての認可を受けた。平成28年度は児童生徒数2,703名、教職員223名（平成28年度４月現在）の世界最大規模の日本人学校である。小学１年生は15クラスもあった。

⑵　校訓

広い心で　　明るく　　なかよく　　たくましく

（昭和37年９月１日制定）

⑶　学校教育目標(目指す子ども像)

- 思いやりのある子（徳育）
- 創造性を発揮し、積極的に学ぶ子（知育）
- 心身の健康をつくる子（健康）
- 国際性豊かな子（国際性）

⑷　教育目標達成のための特色ある教育活動

【徳育】

- 心を育てる道徳授業、あいさつの励行、心の栄養朝読書
- 小１、中３ふれあい交流
- ゆめ集会、中学部進路啓発講演会・職場訪問体験学習によるキャリア教育の推進
- 特別支援教育の推進

【知育】

- 小学部　朝学習で「ことばの学習」
- 中学部　実力テストの実施
- 全学年音楽専科による授業
- 小５算数　習熟度別授業
- 小６教科担任制（国・算を除く）
- 四つのIT教室を活用した情報教育
- 土曜授業による授業時数の確保

【健康】

- 年間を通じた水泳授業（専門のコーチ）　小５　チャアム臨海学校
- 各学年、学期ごとのスポーツ大会
- 万全な危機管理、緊急一斉下校訓練、　非常食の備蓄

【国際性】

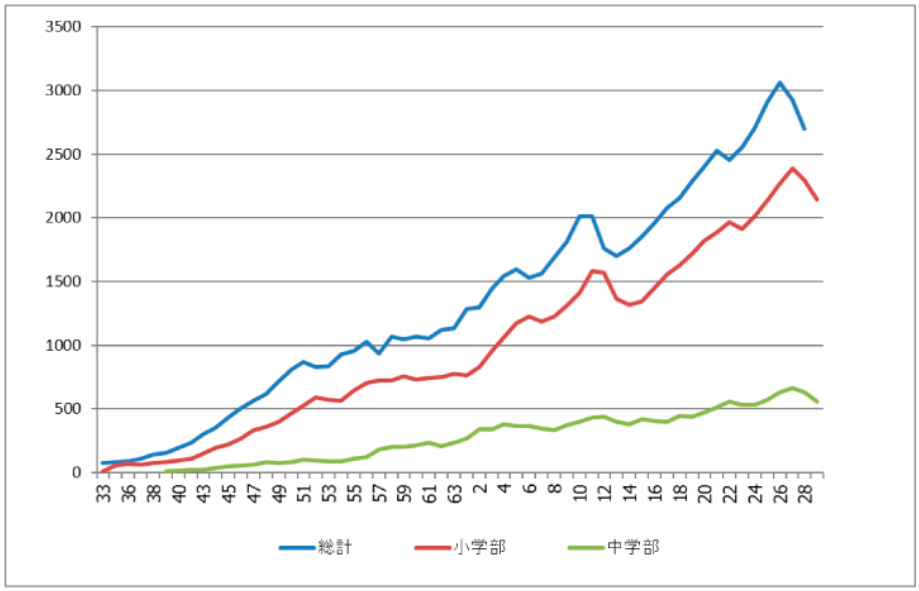
- 生活科や総合的な学習の時間でのタイ国理解教育
- 小１～中２　タイの学校・インター校との交流学習会
- 全学年　週１時間タイ語学習
- 英会話授業　小３～小６週２時間　中学週１時間
- 中１　国際理解学習講演会・ＯＤＡ施設見学

⑸　在籍児童生徒数一覧と年度別推移

平成28年度5月現在

	1年生	2年生	3年生	4年生	5年生	6年生	なかよし	小学部合計
男子	214	220	172	192	182	140	13	1,120
女子	196	198	181	169	163	116	6	1,023
合計	410	418	353	361	345	256	19	2,143
クラス数	15	13	11	12	11	8	3	73
	7年生	8年生	9年生	中学部合計	全校合計			
男子	101	109	73	283	1,403			
女子	105	97	71	273	1,296			
合計	206	206	144	556	2,699			
クラス数	6	6	4	16	89			

⑹　在籍児童生徒数の年度別推移



在籍児童生徒数の年度別推移　平成28年4月23日

⑺　特色ある教育活動

①ゆめ集会

バンコク日本人学校には、キャリア教育の取り組みの一つとして、「ゆめ集会」という学校行事と「学年ゆめ集会」という学年行事があった。全児童が自身の夢を作文にし、その後、学級での発表会の後、代表を１名決める。当時の私が所属した学年は12クラスあったので、各学級の代表者12名が約400名の児童の前で自分の夢について発表した。私のクラスの子どもが書いた夢は、「将来、教師になりたい。」というものだった。その作文には、なぜ、自分が教師になりたいと考えたかの理由が述べられていた。その理由は、「学校の先生の仕事は、子どもの夢を叶える仕事だからだ。だから、僕は、将来、学校の先生になって、たくさんの子どもたちの夢を叶えたい。」というものだった。小学３年生の子どもが綴られた言葉を聞いたとき、それを聞いていた子どもたちや教員は大きな感動を受けた。

②タイの学校との交流学習会

バンコク日本人学校では、現地校との交流学習が、毎年定期的に行われている。

先にも述べたが本校は、タイ国学校法に基づく私立学校に正式認可されているため、インター校として現地の学校と交流しやすいことやタイ国文部省主催の大会への出場ができること、その他タイの行事等にも招待される機会に恵まれているなどのメリットが多い環境にある。

本校の交流学習の歴史は、1976年から国立ダラカーム校との交流から始まった。その頃は、主に運動会を交流の場としたスポーツ交流が中心であった。ダラカーム校とは、排日運動が吹き荒れたときにも交流を続け、現在に至っている。

ダラカーム校以外の学校との交流では、1979年には、チュラロンコン大学附属小学校と姉妹校にな

ったことが最初である。セント・ドミニック校と中学部がサッカーの交流試合やチュラロンコン大学附属小学校文化祭に小４～中３が参加し、ブラスバンドの演奏、剣道を披露した。
1980年には、シーナカリン大学附属小学校、チュラロンコン大学附属小学校、本校との水泳大会。1979～80年の２年間の様々な交流を通じて、現在、チュラロンコン、シーナカリン、カセサート各大学の附属小中学校、そして、ダラカーム校との交流学習が行われていることに至る。

私が所属した３、４年生では、ダラカーム校との交流会を実施した。交流活動活動は、ダラカーム校の児童から、蓮の花の作り方を教えてもらった。ダラカーム校児童の身振り手振りによる熱心な説明で全員完成させることができた。出来上がると、とてもうれしそうに作品をダラカーム校の児童や友達で見せ合っていた。

本校児童は、日本文化を紹介するためにうちわ作りを行った。半紙を色水に付けて台紙を作り、うちわの骨に貼り付けて作った。事前に図工の授業でうちわを作っていたため、持参したそれらを見せながら、「何色が好き。」「ここを持って。」など、タイ語、英語、身振り手振りを駆使して相手の様子を見ながら教えることができた。作業が一つ一つ進むたびに笑顔があふれ、打ち解けていく様子が見られた。

閉会式では、日本人学校は代表児童によるエイサーを披露した。優美な動きを見せながら、音楽に合わせて堂々と踊ることができた。一方ダラカーム校は、タイのムエタイの動きを取り入れた踊りを披露した。格闘家の衣装に身を包み、力強い蹴りや肘鉄など、一糸乱れぬ動きをするダンスだった。最後に全員で「思いやりの花」を合唱した。一緒に過ごした楽しかった時間を思いながら、感謝の気持ちを込めて、一生懸命大きな声で歌う両校の児童の姿が見られた。

③英会話授業

バンコク日本人学校での英会話の授業は､小３～小６週２時間　中学週１時間となっている。本校では平成13年度より、小学部３年生から６年生までの児童に、週２時間、ネイティブイングリッシュティーチャー（以下NET）による英会話の学習を実施している。

英会話の授業を通して、英語に慣れ親しみ、異文化の人々ともすすんでコミュニケーションを図ろうとする態度を育成することを目指している。学習形態については、NETが中心となって英会話の授業を進め、一つのクラスに１名のNETと、担任または英会話専科が入り､計２名で授業を進めている。お互いに連携を図りながら､個に応じた指導を行っている。授業は、本校英会話授業のために採用しているテキストを中心に進め、歌やゲーム等の活動を取り入れ、子どもたちが楽しく意欲的に英語を学べるよう工夫している。

④校外学習について

私が赴任中に引率した校外学習は、小学３年生のマックスバリュ見学と味の素工場の見学、小学４年生でのバンケン浄水場見学とバンコクプラネタリウム・科学博物館だった。バンケン浄水場見学では、バンケン浄水場を運営するタイ首都圏水道公社　（MWA：Metropolitan Waterworks Authority）やJAICAの協力により運営され、日本の資金援助と技術協力によって建設されていることを知る機会となった。

４年生の子どもたちは、沈殿池の施設では、薬を入れてかき混ぜることで、ごみや濁りを固まりにして沈めることを知ったり、ろ過池では、砂や炭を通ることで水がきれいになる説明を真剣に聞いたりした。取水口で見たチャオプラヤー川の茶色い濁った水がろ過池を通過したときには、透き通った水に変わっていることを知り、浄水場の仕組みの凄さと水をきれいにするために働く人々の苦労や努力に気付くことができた。

海外にある学校のため、日本と同じような校外学習を行うには、様々な課題があるが、多くの方々のご協力を得て日本で行われている校外学習に近い実施をすることができている。また、学校からの外で行う学習をすることで、子どもたちにとっても、タイで働く人々と直接関わり合うことで、海外にある学校との認識を改めて感じる機会となっている。

5　プーケット日本人補習授業校について

⑴　プーケット日本人補習授業校の歴史

1998年にプーケット日本語補習学校準備校として開校し、2000年にプーケット日本人補習授業校として開校した。週１回毎土曜日開校、幼稚部９名、小学部17名、中学部９名。

⑵　バンコク日本人学校との交流

2002年には、バンコク日本人学校との巡回指導が年１回８月に開始された。2007年には、バンコク日本人学校より巡回指導が年に２回に増加し、現在は、バンコク日本人学校はタイ国にあるもう一つの補修授業校であるチェンマイ校を担当し、現在は、シラチャ日本人学校が巡回指導を年２回実施している。

⑶　プーケット補修校見学調査

在外教育施設補修校の教室環境や児童の英語力を観察した。補修校は、大学の教室を借りているため、掲示物ができない環境だった。インター校に通っている児童も多く、補修校での授業では、国語科中心の指導が求められていた。

6　現地の学校で実施される教職員研修について

教員宿泊研修では、長期休業中に実施され、現地の小学校へ出向いて授業を行ったり、日本の文化を伝えたりする活動を行っている。私は、赴任した期間に実施された全ての研修に参加することができた。最初の年は、タイ南部「ナコンシータマラート」にあるバーナーキャン校（仏教）とムッサム・サンティタム・ムラニティ校（イスラム教）の２校を訪問した。バンコクは仏教の土地で、生活習慣も日本人にはなじみの深いものもある。タイ南部はイスラム教の土地で、服装からしてもかなり違っていた。タイ南部の地域環境は、世界遺産にも登録を申請している歴史ある場所で、17世紀に政争に敗れた山田長政が終焉を迎えた地でもある。馬屋や使用していた井戸など、そのゆかりのものもたくさん保存されていた。

ラマダン中の時期に学校を訪問したが、小学校低学年、幼稚園は、戒律が緩いので飲食等をあまり神経質にならずに授業を計画でき実施した。高学年、中学校については、きちんと戒律を守

っている児童生徒もいた。授業は、理科・日本語・音楽科・日本の文化・社会科・図画工作科・美術科・体育（特に野球は経験したことがない）などの希望があり、その希望に添うように取り組んだ。

ムッサム・サンティタム・ムラニティ校は、厳格なイスラム教の学校のため、習慣の違いに気を付けて授業を行ったり、子どもたちへの指導を実施した。ラマダン期間中は、日中の飲食はできないので、カルメ焼きなどの飲食を伴うものや体育などで動きの激しいものは避けるようにした。盆踊りなど、文化的要素が強いものは可能だったが、ダンスなどは禁止だった。児童生徒のほとんどがイスラム教徒のため、男子は頭に帽子（ターバン）、女子は全身に布（スカーフ）を着用していた。幼稚園以外は、座席・グループは男女別で編成するようにした。活動も、同じ教室内で男女別で活動させる配慮が必要だった。教師は男女の別なく授業をしてよいとされた。どの学年も１クラス35～45名程度だった。

2014年度は、タイ北部、2015年度は、タイ東北部での現地校を訪問し、授業を行った。タイ東北部は、イサーン地方とも呼ばれる。平均標高約200メートルの緩い起伏が続くコラート高原がほぼ全域に広がっており、ナコーンラチャシーマー県やウボンラーチャターニー県などの「南イサーン」と、メコン川を挟んで隣国のラオスと国境を接するウドンタニー県やナコーンパノム県などの別名「北イサーン」という二つのエリアからなる。古代の農耕文明や、その後のクメール王朝時代の遺跡が各地で発見されるなど奥深い歴史性と、ラオスやカンボジアからの影響を受けつつ育まれてきた独自の伝統文化が魅力的だった。この教職員研修では、バンコクにある現地の小学校とは違った環境や文化の中で学ぶ子どもたちと交流できる貴重な機会となった。

7　最後に（３年間の海外派遣を終えて）

バンコク日本人学校に派遣された3年間は、養護学校で重度重複障害のある子どもたちを長年指導してきた私にとって、教科指導での授業作り、生徒指導、学級経営など、かけがえのない経験をすることができた。さらに、世界で最大級の児童生徒数を要するバンコク日本人学校ならではの、組織的な学校運営なども貴重なものとなった。特に、１年目は、毎日深夜の帰宅で、体力的にも、精神的にも辛いこともあったが、素晴らしい仲間がいたおかげで、一人で悩むことなく、仲間と共に仕事に励むことができた。そして、かわいい子どもたちの笑顔に支えられ、保護者の献身的な協力をいただいた。さらには、タイの教職員や清掃などをするスタッフ、地域の温かいタイの人々の理解のおかげで、素晴らしい３年間を過ごすことができた。心から私を支えてくれた人々へ感謝の気持ちを捧げたい。